井上泰宏（いのうえ・やすひろ）
1986年生まれ　37歳
福岡県北九州市出身。大学卒業後ボートレース関係の会社に就職。2015年から日刊紙記者として若松ボートを担当後、20年から芦屋ボートに常駐。趣味は釣り。車のシート下に餌が転がり込んだことに気づかず、しばらく異臭を放ち続けたのがトラウマ。

イケメン記者の大穴予感！

no.14

勝負どころとリスク

エンジンの力を引き出す

8月には担当場の芦屋でGⅠ72周年記念が行われましたので、その話題を多めにお届けします。先月号では整備巧者の話をしましたが、今号も似たような話から入らせてもらいます。エンジンを出すためにボートレーサーは陸の上で汗を流し、それに伴い試運転も度々行うのですが、部品交換ではない整備の話です。先月号の赤岩善生選手の話の中にもあったのですが、部品交換だけが整備ではありません。今回、話を聞かせてもらったのが上條暢嵩選手。8月1日から行われた芦屋の72周年ではいわゆるボロモーターを引いてしまったのですが、序盤からそこそこの動きを見せていました。「低調機を引いてしまうと好素性機にはかなわないかもしれないけど、そのエンジンの力を引き出せればそれなりにはなるはずなんです。例えば、チルト0で乗りたいとしても本当にこのエンジンにこのセッティングは合っているのかの方が大事だと思うんです」と語ってくれました。そのためにボートとのマッチングから、細かな部品のかみ合わせや気象条件、チルト角度、ペラの形などではなくエンジン本体に合った選択を行うそうです。誰もが行う作業ではあるのですが、その感性に長けているということでしょう。「最近はボロを引いてもそれなりに出せているんです。でも、僕の後に引いた人がそのままいいということは少ないみたいで…」と不思議がってもいましたが、この事実こそが感性の証明にもなっていると言えるでしょう。

6月尼崎でのSGオーシャンカップでは、半数以上がセット交換を行ったことで話題となりました。優勝戦のメンバーも5人がこの大整備を行ってパワーアップに成功していましたが、その中で唯一セット交換をしていなかったのが上條選手で「あれは特に自信になりましたね」と笑顔を見せてくれました。もし上條選手がセット交換をしていたら…というのはやぼな話で、「ほぼほぼ良くなるのが確定しているような整備をしなくても、パワー負けすることなくSGで優出した」という事実が自信につながっているのです。

紙一重の勝負

周年期間中には2件のスタート事故がありました。その1件が強力機で注目を集めていた砂長知輝選手です。4号艇だった2日目に枠番通りの4カドからわずかコン

砂長知輝

上條暢嵩

西山貴浩

石野貴之

マ01のF。伸びを中心に好気配だっただけに「勝負だと思って行ってしまいました」と1着取り、そしてその先の予選突破を見据えて歯を食いしばって行った結果、無情にもわずかに舳先が飛び出してしまいました。

もうひとつのFは西山貴浩選手。なんと2年5か月ぶりのFでした。こちらは2走だった4日目前半の3号艇でのもの。3日目終了時点で得点率はトップ。予選最終走の後半が6号艇だったこともあり、「出ている人がいるので優勝するには予選トップ通過から準優、優勝戦1号艇が必要で、ここで1着が必要だった」と同じく勝負どころとみての踏み込み。「Sを行くつもりだったからなのか、レース前にはいつもは気にしないあっせんの確認を無意識にしていました。早いと思ったのでハンドル操作もいれましたけど、入り切らんやったですね」。久しぶりのFにも関わらず、意外にも吹っ切れた表情でした。行くと決めた時は行くのが勝負師。砂長選手も西山選手も勝つためのリスクを取ったのです。前提としてFは褒められることではありませんが、この勝負する姿勢は個人的には大好き。勝負をしながら冷静であることは素晴らしいことですが、こんな人間味も垣間見えるところが魅力のひとつだと思っています。

優勝した入海馨選手の強さも光りました。オープニングカードを制すと、「3日目ぐらいからトップ通過を意識していた」と3日目後半はコンマ06の二番手S、4日目の1走はコンマ11のトップSで連勝。思惑通りにシリーズリーダーの座に就きました。ここぞという場面ではスリット上でのコンマ01の勝負に自らを追い込むのがボートレーサーで、その勝負がどちらに転ぶかでレーサー人生も変わってくるのです。そんなメンタル勝負も制した入海選手。最終日の早い時間帯に話す時間がありました。非常に落ち着いた姿で「準優は1Mでターンが漏れてしまったけど、それで逃げられたのでかえって仕上がりへの自信になりました。あっ、(優勝戦のターンが)漏れないように尿漏れパッド買ってきてもらっていいですか?(笑)」と軽く冗談も飛ばした時に「優勝するんだろうな」と感じさせられました。表彰式後に記者会見も行われたのですが、それも終わった後に個人的に一声祝福をと声をかけると「ターンは漏らさなかったけど、少しちびりました(笑)」とまたまた笑わせてくれました。記念戦線への定着、そしてSGへと戦いの場を移す入海選手の今後にも注目です。

森高一真

暑さ、紫外線対策

さてさて、夏真っ盛りの開催だったこともあって、選手は大粒の汗を流しながらの作業。石野貴之選手や山口剛選手は空調服を着てエンジン吊りに出てきていました。数年前では考えられないような暑さなので、体調管理のためにもこういった対策が必要になりますね。最も夏を感じたのは森高一真選手!

ねじり鉢巻きがよく似合います。今年の芦屋でのベスト夏男と言っても過言ではないでしょう。番外編として周年の後のお盆シリーズで走った幸野史明選手の写真も…。決して冗談ではなく、網膜保護のため。ボートレーサーにとって視力は選手生命に関わることですから、予防も兼ねてサングラスをかけているようです。

幸野史明